

# NEW LIFE

11 artists from Denmark and Sweden in TOKYO

1999.2.12 3.13



N55 "HOME HYDROPONIC UNIT" (1997)

Scandinavian Art Show Committee

106, 4-25-7 Kamikitazawa Setagaya-ku Tokyo1560057 JAPAN  
TEL/FAX +81 (0)3 3302 8082 e-mail: ming@t3.rim.or.jp

# NEW LIFE

11 artists from Denmark and Sweden in TOKYO

## 「ニューライフ」展開催のお知らせ

### 北欧でいま何かが起きている？

～ デンマークとスウェーデンのアートに見い出す、わたしたちの新しい生活、新しい未来 ～

デンマーク、スウェーデン、ノルウェイ、フィンランド、アイスランド、といった北欧の国々--と聞けば、白夜、オーロラなど広大な自然と少ない人口、世界に名だたる高福祉などがイメージされます。と同時に、そこで育まれた、モダンで洗練された建築・デザイン・工芸の素晴らしさも、既によく知られています。しかし、その一方で、現代美術の分野での活動は長いあいだヨーロッパの周縁的な位置に置かれ、日本に紹介される機会もわずかでした。

「北欧のアートが面白い！」--世界のアートシーンでそう囁かれ出したのは90年代半ばのこと。事実、その頃から北欧のアートは急激な変化を見せ、斬新なビデオやインスタレーションなどを試みる若いアーティストが続々と現われてきたのです。そして、新鮮で自由な彼らの表現は、主にヨーロッパでの国際展を通して世界的な注目を集めるようになります。

たとえば、身障者をテーマにした強烈なインパクトのコンピュータアニメーションを制作するマグナス・ヴァリン（スウェーデン、'65年生まれ）、アフリカで燃料用有機ガスの開発プロジェクトを行うスーパーフレックス（ユニット名/デンマーク）、アートと家具のちょうど中間に存在するような生活道具を制作するN55（ユニット名/デンマーク）など、彼らの作品の多くは他には例のない、とてもユニークなものです。

個々人のリアリティに基づきつつ、様々な活動を繰り広げている彼らですが、そのなかにはある共通点を見い出すことができます。ひとつは、インターネット、デジタル技術、テクノ、レイヴなどテクノロジーが可能にした新しい体験を背景にしながら「では、私達はこうした環境の中でどう暮らしていくのか」という課題をめぐって、社会の現状への批判やコメントだけでなく、エネルギーに具体的なイメージ・提案を提供したり、実際にアクションを起こしていることです。

北欧のすぐれた建築・デザインは、つねに環境と一体化した人間の生活、新しい未来の提案でもありました。現在の北欧のアートも、テクノロジー時代以降の人間のあり方を問いかけているように思えます。そして、それは日本、また東京の課題とも大いに重なるものでしょう。この『NEW LIFE』展を通じて、北欧のアートの第一線を担う彼らの活動に目を向けるとともに、東京という巨大都市に暮らす私達の生活をあらためて考え直す機会となれば幸いです。

なお、スウェーデンとデンマークから参加する11組のアーティストはすべて、今回が日本での初めての展覧の機会となります。

## 開催要項

名 称：NEW LIFE

アーティスト：デンマーク Jens Haaning、Joachim Koester、Nikolaj Recke  
N55、Peter Land、Superflex

スウェーデン Elin Wikström、Henrik Håkansson、Magnus Wallin  
Peter Geschwind、Steven Bachelder

日 本 小粥丈晴 + 雄川 愛、曾根 裕、眞島竜男

会 期：1999年2月12日(金)～3月13日(日) (\*会場により会期が多少異なります。)

会 場：現代美術製作所(東向島/2月12日～3月7日)

小山登美夫ギャラリー(佐賀町/2月12日～3月6日)

スウェーデン大使館 展示ホール(神谷町/2月12日～3月3日)

ナガミネプロジェクト(銀座/2月12日～3月13日)

ナディッフ(原宿/2月12日～3月7日)

ヒルサイドギャラリー(代官山/2月12日～2月28日)

ミヅマアートギャラリー(青山/2月13日～3月13日)

P-House(恵比寿/2月12日～3月5日)

入 場：無料

主 催：北欧アート展実行委員会

共 催：テクノ展実行委員会

助 成：デンマーク現代美術財団(DCA Foundation)、芸術文化振興基金  
IASPIS(International Artists' Studio Program in Sweden)

協 賛：スウェーデン大使館、デンマーク大使館

アサヒビール株式会社、トヨタ自動車株式会社

ノルディスカ・ヒュース ジャパン株式会社、ファルマシア・アップジョン株式会社

協 力：松下電器産業株式会社、siksi(Nordic Art Center)

横浜美術学院芸術助成活動、SAS Cargo

認 定：社団法人 企業メセナ協議会

企 画：Scandinavian Art Show Committee(西原みん、黒沢伸、大橋浩美)

関連企画：トークショー「individuality & madness」

～北欧アートの現況、及び興味深い日本との類似性について～

主 催：スウェーデン大使館

日 時：1999年2月12日(金) 18:30～20:00

会 場：スウェーデン大使館 オーディトリウム

出 演：ジョン=ピーター・ニールセン('99ヴェニスビエンナーレスウェーデン館コミッショナー)

建島 哲(多摩美術大学教授、美術評論家)、西原みん(「NEW LIFE」展キュレーター)

入 場：無料/先着80名(同時通訳付、内容については出演者の都合により変更となる場合があります。)

\*展覧会初日、2月12日(金)の20:00～(トークショー終了後)より、  
スウェーデン大使館にて、アーティストを囲んでのレセプション・パーティを開催いたします。

お問い合わせ = tel. 03-5685-0532 / fax. 03-5685-0544 (黒沢)

「NEW LIFE」展 ホームページ = <http://www.muse.co.jp/newlife/> (1999年1月オープン)

## 参加アーティスト

### デンマーク / DENMARK

#### ジェンス・ハーニング ( JENS HAANING )

1965年 コペンハーゲン生まれ / 在住

ギャラリーを作業場に、ストリートキッズ達と弓矢やヘルメット、罨や目だし帽など、抗争のための武器をつくるプロジェクト (1995)、美術館内に縫製工場を出現させ、イラン、トルコ、ボスニアなどの移民12人の工員が会期中縫製を行う (1996)、美術品には関税がさほどかからないことを利用して食料品を安価に輸入しギャラリー内で市民に大安売りする (1998) など、エネルギーに人々を巻き込みながら、アート / 都市 / 移民 / 労働の価値、などを強烈に印象づける内容のプロジェクトを発表している。

ミヅマアートギャラリーにて新しいプロジェクトを展開する予定



Jens Haaning "Weapon production" (1995)

#### ヨアキム・コースター ( JOACHIM KOESTER )

1962年 コペンハーゲン生まれ、コペンハーゲン & ニューヨーク在住

ビデオ、写真作品を主に手がける。「"どのように" 描写するか、という点に興味がある」と語っているように、その作品はドキュメンタリーとドラマタイズのはざまを追及していく。たとえば、ドクメンタXに出品されたビデオ作品 (1996) では、カルテットの発表会とそれを見に来た家族、という小さな出来事の記録が、あたかも取り返しのつかない一瞬一瞬であるかのように描写されていた。コースターはゴダールにしばしば言及するが、特にタイトルも "Weekend" なる作品は、ゴダールの同名の映画における描写をシミュレートしたものだ。その舞台はクリスチアニアというコペンハーゲンの自治解放区であったが、1996年に制作された写真およびビデオの作品、"Day for Night" でも再度この解放区が舞台となっている。ブルーフィルターを使って「昼に夜を撮る」(かつてトリュフォーが披露した手法) ことにより、作品は、このデンマーク随一の猥雑で社会的論議の的である地区の歴史を物語ることになる。( \*siksi 12号、カストゥ・ロバーツによるインタビュー )

小山登美夫ギャラリーにて展示



Joachim Koester "Day for Night, Christiania" (1996)

#### ニコライ・レッケ ( NIKOLAJ RECKE )

1969年生まれ、コペンハーゲン在住

レッケの作品は、アートを愛してやまない彼自身のアートに対する死にもの狂いの探究から生まれる。たとえば、鼻を赤く塗ってスケートボードに乗りギャラリーの壁に激突するイヴ・クラインへのオマージュ「スケーター・クライン」や、自ら尊敬するアーティストの想像上のシーンを描いたドローイング・シリーズ、また現実にアメリカの有名アーティスト、ロバート・モリスとのやりとりを記録したビデオ作品などだ。そればかりでなく、レッケはときに観客をその探究に連れ出そうとし、見知らぬ人々15人に電話をかけて自分のアートについて語るプロジェクトなども試みている。「それらを通して、誰もが、アートそのものでなく、結局は彼ら自身が何かを探すことに結びつくのだ」というレッケの最新作は "4-Clover field" (四つ葉のクローバーを探して) である。

ナガミネプロジェクトにて展示



Nikolaj Recke "4-Clover field" (1998)

#### エヌ55 ( N55 )

1994年から活動を開始

コペンハーゲン在住のグループで、当初の住所が Norre Farimagsgade 55 であったところから、この名前がついた。現在は4人のメンバーがともに生活、制作、展示を行っている。彼らは世界に名高いデンマークのデザインへのアイロニカルなオマージュともいえる家具シリーズを制作、そればかりか自分たちが住んでいるアパートメントでしばしば展覧会を行い、それらの家具を実際に用いて生活しているところを見せながら販売なども行うという、ユニークな活動形態をとる。まさに新しいライフスタイルの提言でもある。主な作品にトイレと風呂を衛生的にサーキュレーションさせるユニット家具 "HYGIENE SYSTEM" (1997)、家庭内用水耕栽培システム (1997)、スタイリッシュなコンポスト (1998) など。取り扱い説明書なども完備。

P-Houseにて展示



N55 "HYGIENE SYSTEM" (1997)

## ピーター・ランド ( PETER LAND )

1966年 オーフス生まれ、コペンハーゲン在住

本人による卓越したパフォーマンスで、観客が思わず笑わずにはおれないビデオ作品を制作、既にヨーロッパでは広く作品を発表してきた。椅子にすわることに失敗し続ける(1995)、ワグナーの音楽とともにペンキを塗ろうと登ったはしごから落ち続ける(1996)など永遠に失敗し続ける失敗マニア的なビデオと、チェロの演奏などにチャレンジするものうまいかず、結局自ら裸になって踊り続けたり(1998)、やはり裸の本人がお気に入りの音楽で踊り続ける日記的な映像を含む「ピーター・ランド」シリーズなどがある。

現代美術製作所にてこれまでの代表的な5作品を展示



Peter Land "The Cellist" (1998)

## スーパーフレックス ( SUPERFLEX )

90年代半ばから活動を開始

コペンハーゲン在住の3人のメンバーからなるグループ。アフリカの人々の経済と生活をたずける目的で、グループのトレードカラーであるオレンジ色のパッケージを使って、シンプルで持ち運び可能、植物を伐採せずに家畜の糞を再利用することで燃料が得られる家庭用有機ガスのシステムを開発する「バイオガス」プロジェクトをタンザニアで行ったり、いつでもどこでも簡単に楽しめるテント型「オレンジ・サウナ」の普及につとめている。ともに「捨てないで!」をスローガンに、エコロジカルな視点からエネルギー節減とリサイクルを呼びかける趣旨がある。しばしばレクチャーを行う一方、音楽レーベルを立ちあげてCDをリリースしたり、DJ、ラジオ番組制作まで、多岐にわたる積極的な活動を行っている。

ヒルサイドギャラリーにて展示



Superflex "Biogas" in Africa (1997)

## スウェーデン / SWEDEN

### エリン・ヴィクストロム ( ELIN WIKSTRÖM )

1965年 ヴァステラス生まれ、ヨーテボリ在住

スーパーマーケットにベッドを持ち込み3週間何もせず寝て暮らして(1993)以来、ヴィクストロムはつねに彼女自身がメディアとなってその周辺を変容させるプロジェクトを実行し続けている。美術展の入場料を1クローネ増やし、それを何に役立てるかを説明したり来場者が要望を出せるブースを設置する(1996)、漕ぐと後ろ向きに逆走する自転車を用意して、観客のトレーニングに携わる(1997)、新聞広告を通して知った実在する「ワイマール氏のこと」を説明する紙芝居(1998)など。われわれを取り巻くありふれた社会の構造をすぐれた着眼点からあらわにし、それを抜群の実行力で視覚化していく。リレイティヴ・アート系では北欧を代表するアーティスト。

本展では東京に長期間滞在して行うタイプのプロジェクトを計画中。  
ナディッフにて、随時、情報を告知します。



Elin Wikström "A Portrait of Mr Weimar" (1998)

### ヘンリク・ハカンソン ( HENRIK HÅKANSSON )

1968年 ヘルシンボリ生まれ、ストックホルム在住

『Get Lost』展(1996年、ルイジアナ美術館のNOWHERE展の1パート)では、ビデオとテクノロジーがつくりだした新しい空間と時間の広がりや問題提起された。その展示会のコアとなった、ミニ・ジャングルをつくってカエルの生態系の条件を整え、DJのテクノの演奏でカエルを踊らせる作品などで、一躍北欧のスター的存在に。作品の特徴は、生きものを使うことにある。カエルの他、ギャラリーでさながらロックコンサートのようにPAシステムのマイクを使ってコオロギが演奏をする(1995)、蝶の孵化システムを展示、実際に展示会場で蝶を繁殖させるというプロジェクト(1997)など。昆虫やカエルと会話さえ試みるハカンソンは、それら生物の中に人間の未来を見い出している。

スウェーデン大使館 展示ホールにて展示



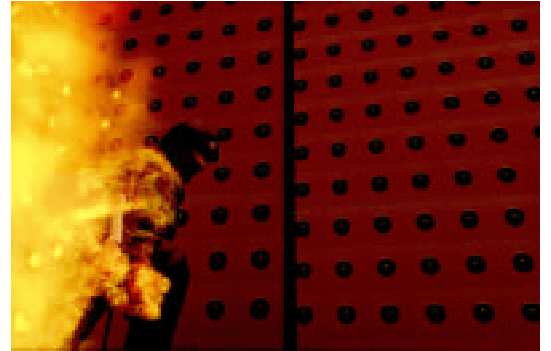
Henrik Håkansson  
"Out of the Black into the Blue" (1997)

## マグナス・ヴァリン ( MAGNUS WALLIN )

1965年 マルメ生まれ / 在住

ヒエロニムス・ボッシュが描いた人物をアプロプリエイトした人間たちが巨大な炎の壁に追われて逃げまどう、シリコングラフィクスによるアニメーション作品"Exit" (1997) で一躍ヨーロッパ中の注目を集めている。もともとビデオ作品を主に制作していたが、それらもアニメも一貫して身体障害者の視点(アーティスト自身も障害を持つ)から、身体そのものも持っている暴力性を表出、そしてオルタナティブな肉体のありかたを問いかける。主な作品に車椅子に乗った身体障害者の人々が集うドライブ・インを撮ったもの(1997)、車椅子で高級ホテルの内部を疾走する様子を描いたビデオ(1995)などがある。最新作は宇宙船を舞台としたアニメーション。

現代美術製作所にて展示



Magnus Wallin の "Exit" (1997)は映像と心音を使った音楽で脱出劇の切迫感を味わわせる。

## ピーター・ゲッシュウィンド ( PETER GESCHWIND )

1966年 ストックホルム生まれ / 在住

北欧の玩具を思わせる、素朴な子供のおもちゃのような作品をつくりだすアーティスト。しかし、それらの「おもちゃ」はユーモアと悪意、ときにインダストリアルライクで単調な動きの先にあるカタストロフに満ちている。たとえばギャラリーの中をゴミが動き回る「動くゴミ」シリーズ、観客がペダルを踏んで回転させればさせるほど楽しげに回る人形がバラバラになっていく"Merry-go-round" (1995)、互いを殴ったりけとばしたりしながら回る動物たちのおもちゃ(1996)など。

現代美術製作所にて展示



Peter Geschwind "Merry-go-round" (1995)

## スティーヴン・バachelダー ( STEVEN BACHELDER )

1961年 米サンディエゴ生まれ、ストックホルム在住

本物の樹に人工の樹と造花を接いだ「桜の木」(1994)、模造の犬に毛皮を被せた生きているかのような「シベリアンハスキー」(1996)など、自然と人工の自然(そのどちらも今日ではともに自然であるにしても)を再転倒させる一連のユーモラスなプロジェクト、また、おもちゃを壁に大きく投影して観客をおもちゃの世界にさまよい込ませる作品(1996)、子供たちのために作戦基地と玩具の武器、さらにスパイダーマンの衣装を用意して、彼らがアートピープルをやっつけるヒーローとして活躍する(1997)など、子供時代の純粋な楽しみを呼び覚ますプロジェクトを実現している。

スウェーデン大使館展示ホールにて展示



Steven Bachelder  
"Vicarious qualities through incremental repetition or Super heroes" (1997)



Steven Bachelder "CherryTree" (1994)

## 東京 / TOKYO

NEW LIFE展では東京からも3組のアーティストが"友情参加"します。

### 小粥丈晴 + 雄川 愛 ( TAKEHARU OGAI + AI OGAWA )

1997年から活動を開始、東京在住

精密につくりあげられた模型(ジオラマ)を使い、行ったことのない土地の風景を写真にカットアップする。それは現実には存在しない場所、しかし誰もがどこかで見たことのある場所であり、人々のデジャヴを誘う。そのデジャヴは、この時代のメディアの氾濫によってもたらされたものなのか、それともより深くわれわれの記憶に根差すものなのか。まだ活動を始めて日が浅いが、今後を期待されているユニット。

現代美術製作所にて展示



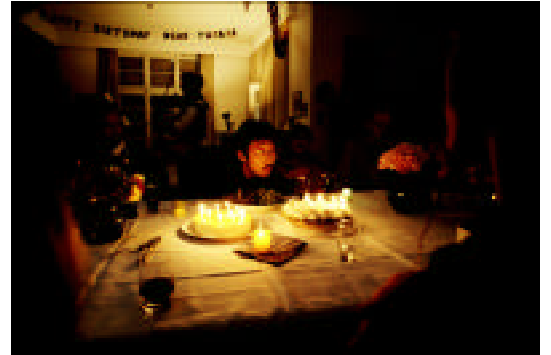
小粥丈晴 + 雄川愛 "97.2.8" (1997)

### 曽根 裕 ( YUTAKA SONE )

1965年 静岡生まれ、東京在住

一輪車様の自転車を連結させ、19人でコミュニケーションを図りながら走らせるデビュー作 "Her 19th Foot" は日本をはじめ、アジア、ヨーロッパの世界各地で展開している。一方で "Night Bus" (1995) やミュンスター彫刻プロジェクトで発表した "Birthday Party" (1997)、また "Magic Stick" (1998-1999) などのパフォーマンスをはらんだビデオ/インスタレーション作品で、数々の国際展でも高い評価を得る。1997年の香港島を精密に彫った大理石の彫刻に続いて、アメリカではジェットコースターの大理石彫刻を発表、一方油彩や鉛筆画でも評価を得るなど、活動は多岐にわたり、そのコンセプチュアルな展開に最も目が離せないアーティストのひとり。

現代美術製作所にて展示



曽根 裕 "Birthday Party" (1997)

### 眞島竜男 ( TATSUO MAJIMA )

1970年 埼玉生まれ、東京にて制作

主に映像表現を手がける。他に写真、彫刻、水彩などを使い分け、言葉と意味と映像のぶれをユーモラスかつ優雅に示す作品が多い。幾つかの駄洒落的なショート・ビデオのほか、緻密に用意された脚本をもとに、日本洋画界の黎明期を舞台に壊れた映画のような物語世界が展開する長編ビデオ作品「日本近代美術 / 楽しき国土」(1995) などがある。細部のみのリアリティが世界を形づくるフィクションの構築法が持ち味。本展では、バイキングの物語をテーマにしたビデオ作品「カリフォルニア」(1997)で参加する。彫刻では、トナカイの模型やミロのヴィーナスに衣をつけて揚げてしまう「天ぷら」の作品などがある。

スウェーデン大使館展示ホールにて展示



眞島竜男 "California" (1997)

## 連絡先等

「NEW LIFE」に関する情報、北欧関連書籍、ビデオの紹介、販売について  
展覧会場は都内の広域にわたっておりますが、会期中、ナディッフにおいて、同展に関する様々な情報  
にアクセスすることができます。参加アーティストを中心に、北欧アート関連書籍、ビデオ等の紹介・  
販売をいたします。また、1999年1月よりホームページ (<http://www.muse.co.jp/newlife/>) を開設す  
る他、関連企画も進行中です。追ってご連絡申し上げます。

-----  
貴紙 / 誌にて是非とも告知、取材をご検討ください。

アーティストは全員が来日を予定しています。

インタビュー取材など歓迎です。  
-----

写真が必要な場合は、北欧アート展実行委員会・黒沢までご連絡下さい。  
tel.03-5685-0532、fax.03-5685-0544、e-mail: shin@muse.co.jp

内容についてのお問い合わせは  
北欧アート展実行委員会・西原 tel & fax. 03-3302-8082 までお願いします。

掲載時の「問い合わせ」表記は  
現代美術製作所 tel & fax. 03-5630-3216 でお願いいたします。

各会場の開催日程、並びに連絡先は以下の通りです。

現代美術製作所 2月12日(金)～3月7日(日) 12:00～19:00 (土・日曜日は18:00まで)、月・火曜休み  
東京都墨田区墨田1-15-3 tel. 03-5630-3216

小山登美夫ギャラリー 2月12日(金)～3月6日(土) 11:00～19:00、日・月曜休み  
東京都江東区佐賀1-8-13 食糧ビル2F tel. 03-3630-2205

スウェーデン大使館 展示ホール 2月12日(金)～3月3日(水) 9:00～17:00、土・日曜休み  
東京都港区六本木1-10-3-100 tel. 03-5562-5050

ナガミネプロジェクト 2月12日(金)～3月13日(土) 11:00～19:00 日・月曜休み  
東京都中央区銀座7-2-17 南欧ビル4F tel. 03-3575-5775

ナディッフ 2月12日(金)～3月7日(日) 11:00～20:00 会期中無休  
東京都渋谷区神宮前4-9-8 カソレル原宿B1 tel. 03-3403-8814

ヒルサイドギャラリー 2月12日(金)～2月28日(日) 11:00～18:00 会期中無休  
東京都渋谷区猿樂町29-18 ヒルサイドテラスA棟 tel. 03-3476-4795

ミヅマアートギャラリー 2月13日(土)～3月13日(土) 11:00～19:00 日曜休み  
東京都渋谷区神宮前5-46-13 ツインエスビル1F tel. 03-3499-0226

P-House 2月12日(金)～3月5日(金) 14:00～20:00 月曜休み  
東京都渋谷区恵比寿西1-29-9 tel. 03-5458-3359

備考 (注意の必要な作家名の表記について)

エリン・ヴィクストロム : ELIN WIKSTRÖM / Elin Wikström ( Ö / ö に注意 )

ヘンリック・ハカンソン : HENRIK HÅKANSSON / Henrik Håkansson ( Å / å に注意 )